

オホーツク文化の動物意匠遺物集成 (2)

高橋 健*

はじめに

昨年はオホーツク文化の動物意匠遺物の図と一覧表を掲載した(以下、前稿とする)。今年は出土遺跡及び資料について記載する。昨年は23遺跡・227点を集成していたが、見落とししていた資料5点を追加し(図25、表1-(5))、24遺跡・232点となった。また、一部の資料について補足のための参考図(図26)および新たな写真・図(図27)を掲載した。図表の番号については、昨年からの連番としており、同一資料の場合はアルファベットを加えて区別した。

資料

動物意匠遺物が出土した24遺跡を道北部と道東部に分けた上で、それぞれ地域ごとのまとまりにしたがって述べていくことにしたい。道北部は利尻礼文両島から枝幸まで、道東部は湧別から根室までとする。日本海沿岸やオホーツク海沿岸の枝幸―湧別間にもオホーツク文化の遺跡はあるが、動物意匠遺物の出土は知られていない。

道北部

道北部では、12遺跡から87点が出土している。ネズミザメ吻端骨製のクマ座像が40点以上出土した香深井1遺跡が突出して多い。この他にも、礼文島北部の牙製像(女性・クマ)、枝幸の土製像など特徴的な素材利用がみられる。礼文島、利尻島、宗谷地域(島嶼部以外)に分けてみていきたい。

礼文島

礼文町 浜中遺跡(図3-1~3-6、図25-6a)

礼文島北岸の船泊湾のほぼ中央の海岸砂丘上に広がる遺跡である。1949年に北海道大学によって船泊砂丘遺跡として調査されたのをはじめとして、近年に至るまで繰り返し発掘調査が行われている。縄文文化期からアイヌ文化期までの複合遺跡であり、オホーツク文化についても十和田式期から沈線文期、さらに元地式期に至る各時期の土器が出土している。北海道教育委員会の埋蔵文化財包蔵地としては、浜中1遺跡、神崎遺跡、浜中2遺跡などに分かれて登録されているが、本稿では浜中遺跡と一括して扱うことにしたい。

北海道大学による1949年の調査では、船泊砂丘第二遺跡から基部に尻尾の大きなキツネの彫刻を施した髪飾りが出土した(1)。成人女性の10号人骨の右上腕骨上から円盤形垂飾(クックルケシ)とともに出土したものである。道北島嶼部の墓は被嚮を伴わないため厳密な時期比定は難しいが、オホーツク文化期のものであることは間違いなさだろう。

1990年には浜中2遺跡で排水管の付け替えによる緊急調査が行われ、動物意匠を施したヘラが出土した(2)。板状の基部に動物のシルエットを表現する点は1と共通しているが、脚の曲がり方や尾の細さからトカゲだと考えられている。B区Ⅲ層から出土しており、オホーツク文化後期のものである。トカゲの反対側の側縁には縦の刻線で細い棒状に作出した部分に平行短刻線を並べている。頭部がはっきりしないが、オンネモト遺跡例(221)と共通するヘビの表現の可能性があるが、そうだとすれば、爬虫類2種類を表現したことになる。

北海道にはヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビ、コモチカナヘビの三種のトカゲが分布してお

*TAKAHASHI Ken 横浜ユーラシア文化館主任学芸員

り、特にコモチカナヘビ *Zootoca vivipara* は広くユーラシアからサハリン、道北部にかけて分布する種である。また、北海道北部に分布する横縞をもつヘビとしては、ニホンマムシとシマヘビが挙げられる。トカゲもヘビも現在の礼文島には生息していないが、オホーツク人はサハリンないし北海道本島での知識をもっていたのだろう。

3は、千葉大学（礼文・利尻遺跡調査の会）による2015年の浜中2遺跡の発掘調査で出土した四本足のクマ像である。マッコウクジラの歯製で、尻側には歯髄腔があり、層状の構造がみえる。耳と口は表現されているが、目鼻は確認できない。7b区11層下部（ほぼ12層上面）から出土したとされる。沈線文系土器に伴ったものとみてよいだろう。

6は前稿では礼文島内出土とした歯製クマ像だが、出土地点が浜中2遺跡の範囲に含まれることが明らかになった⁽¹⁾（図27-6a）。やはり海獣歯製で四本足のクマ像である。

浜中2遺跡からは、北海道大学アイヌ・先住民研究センターによる2016年の発掘調査でも骨製クマ頭部像が出土した（図26-1）。この資料は縄文文化期の層から出土したとされている。クマ頭部像はオホーツク文化で一般的な形態の一つであるが、縄文文化晩期にも滝川安井遺跡の石製品例がある。時期的に今回の集成対象外であるが、参考資料として掲げておく。

礼文町 上泊遺跡（図3-4）

礼文島東岸の北部に位置する。上泊灯台のある小さな岬の南、2本の小沢にはさまれた高さ20m弱の海岸段丘上から鈴谷式・オホーツク式土器が採集されるという（大井1976）。

4は四本足の歯製クマ像であるが、採集品のため出土状況等は不明である。北海道大学による報告では「第一遺跡の西方砂丘」（浜中2遺跡の西）の出土とされていたが（児玉・大塚1952）、大塚（1968）によって上泊遺跡出土と訂正されたものである。背

中から脚にかけてひだ状の組織を残している点が大きな特徴である。目と耳の表現はないが、鼻はしっかり彫り込まれており、未成品ではない。右前脚は後世に補修されている。尻側には歯髄腔がみられる。

大川は、ウエントマリ（上泊）遺跡下の海岸で発見されたという「歯製彫刻全身像」に言及している（大川1998）。1949年に実見したが、1950年に再訪した時には北大・児玉氏に貸与中だったために実測できなかったと述べ、記憶にもとづくスケッチを示している（図26-2）。1952年の児玉・大塚報告に掲載された歯製クマ彫刻は1点のみであるが（図26-3）、これは明らかに資料4と同一個体である⁽²⁾。大川のスケッチとの相違点は大きいものの、同一資料だと判断しておきたい。

この資料はクマ像とされてきたが、ひだ状の表現からトラの可能性を考えてもいいかもしれない。もちろん北海道にトラは分布しないが、アムール川流域はシベリアトラの生息範囲であり、オホーツク人がトラを知っていた可能性はある。ただしシナイなどアムール下流域の先住民の作るトラの彫像は尻尾がまっすぐ後ろに伸びていることが多く、この歯製像とは異なっている⁽³⁾。

礼文町 内路（ナイロ）遺跡（図3-5）

礼文島東岸やや北寄りに注ぐ内路川の河口付近右岸に位置する遺跡である。大川によって1949年・50年に発掘された。クマ頭部像は1950年に郵便局舎南の昆布乾場のB地点、表土下約25cmの黒色腐食砂質土層の上部から出土した。同地点からは、オホーツク文化の刻文系から貼付文系の土器が出土している。大川によれば、頭部の破片ではなく最初から頭部像として作られたものであり、後頭部の欠損は発掘時のものらしい。素材はトドの脊椎骨だとされている。

礼文町 香深井1遺跡（図4-7～図8-63）

礼文島東岸の南部に注ぐ香深井川の河口付近に分

布する香深井遺跡群のうち、左岸の標高 4m 弱の小砂丘上に位置するのが香深井 1 遺跡（旧称・香深井 A 遺跡）である。1968 年から 72 年にかけて北海道大学北方文化研究施設によって発掘調査が行われ、オホーツク文化期の竪穴住居 5 軒と墓・石積み遺構、竪穴のくぼみなどを覆う 6 枚の魚骨層が調査された。オホーツク文化の十和田式期から沈線文期にかけてを主とする。

香深井 1 遺跡では、ネズミザメ吻端骨製の動物像が 45 点出土した（7～51）。ネズミザメ吻端骨の素材の形状を生かして作られている。写実的なクマ座像（7）や大型魚を抱えている様子がわかる例（12・14・17）、があるが、省略された表現のものも多い。しかし、基本的にはクマが大型魚（サケ？）を抱えて座った様子を表したと考えられている。ただし、魚ではなく何らかの容器を持っている例（9）もあり、クマというよりも海獣に近い印象を与えるものもある（28・50・51）。48 は四足獣を表しており、丸々としたプロポーションと短い鼻面はブタを思わせるものがある。49 は「人間をあらわしたものとしてほぼ誤りないのではないか」と報告されたものだが（大井編 1981: p.58）、破損している口の部分が突出していることを考えると、海獣のようにも見える。このほか、人間を表現した可能性が高いと考えた資料 2 点（高橋 2021: 図 4 - 2・5）は今回の集成から省いた。ネズミザメ吻端骨製彫像は、魚骨層 II から 12 点、魚骨層 IV から 15 点出土しているが、背面に孔をもつもの（30・32・34・37・39・42・44～46）や平らに削ったもの（28・30）が魚骨層 IV に多いことが指摘されている（大井編 1981: p.391）。

52・53 は 1 号 b 竪穴から出土した不詳角製品である。52 は鹿角の第一枝分岐部を用いて、角座部の周囲を削っている。第一枝の外側に、鰭脚類の全身を浮彫で表現している。角幹部を切り落とし、その端には四本脚の突起を設けている。角幹部には長方形の穴をあけ、目釘穴状の小円孔を設けている。53 は棒状の角製品の端部に海獣の頭部を表現して

いる。52 は埋土、53 は柱穴中から見つかったものだが、報告では 53 を 52 の長方形の穴にはめ込んだ可能性が想定されている。

54 は 1 号 a 竪穴床面から出土した、頭部に一對の逆鉤をもつ前田 A 群 3 類銛頭である。尾部は周縁を鋸歯状にしており、背面側中央に魚を線刻で表現している。おそらく海獣骨製であろう。

55 は 1 号 d 竪穴床面から出土したトド犬歯製の垂飾である。丁寧に加工され、光沢をもつ。ひれ状の後肢を前方に向けて折りたたんだ様子を表現しており、アシカ類であることは間違いない。背面に 2 本の刻線に挟まれた短刻線を並べた梯子状の装飾をもつ。報告では首の周囲に施された刻点とあわせてタテガミの表現とみなし、タテガミをもつオットセイないしトドのオスを表したものと考えている。ただ、アシカ類のタテガミは背筋全体に及ぶものではない点にやや疑問は残る。56 は魚骨層 IV から出土したクジラ類の歯牙製品である。腹面側に横長の穿孔を施している。垂飾というよりも留め具といえるかもしれない。

57 は 2 号竪穴床面から出土した鹿角製のスプーンである。柄の端部に海獣の頭部が表現され、首の周りには鋸歯文が 2 重に施されている。スプーンの軸には縦長のスリットが設けられている。匙部分は欠損している。

58 は 1968 年調査のトレンチ 4 層から出土したアホウドリ上腕骨製の針入れである。この層は魚骨層 IV に対応する可能性が高いとされている。片面に線刻による装飾を施す。右側に描かれている動物は、頭部・背びれ・胸びれの形態からゴンドウクジラだと考えられている（大井編 1981: p.299）。左側の文様の意味は不明であるが、刺し網やテントのようにも見える。

59・60 は土製品。59 は海獣の上半身を表したもので、目と口を刻みで表現している。口に直交して入れられた連続する刻みはヒゲだと報告されたが、歯を表したものではないだろうか。この種の土製

品は湧別川西遺跡出土の88のような牙製品を写したものだと考えられる。60は表土出土の土製品で、四足獣の胴部破片であろう。

61～63は土器片で、61は水鳥貼付文、62・63はクマ足跡の型押文をもつ。水鳥は右向きである。クマは5本の指をもつが、足跡では拇指が浅く目立たないことが多い。縦長の楕円形をした形状からヒグマの後肢の足跡だと考えられる。

利尻島

利尻富士町 利尻富士町役場 (図8-64)

利尻島北岸、北東に向かって突き出したペシ岬の南東側の鴛泊港を見下ろす標高13～18mの段丘上に位置する。1932年に名取武光らによって調査され、1994年・2009年には道路工事に伴う緊急調査が行われた。

64は2009年調査のピット102から出土したネズミザメ吻端骨であり、クマ座像の未成品だと報告された。このピットからは他に遺物は出土しておらず、遺跡全体では鈴谷式から沈線文系の各時期の土器が出土しているため、時期は絞り込めない。

利尻町 亦稚貝塚 (図8-65・66、図25-228)

利尻島西岸に突き出した杓形岬の南の入り江に面している。海岸線から100mほど離れた標高5～6mの砂丘上に位置する。1900年に人類学会員藤井秀による発掘で牙製婦人像が出土したことで知られている。1977年に宗谷バス杓形バスターミナルの工事に伴う緊急調査が行われ、鈴谷式期からオホーツク文化の各時期にわたる遺物が出土した。

228は第1ブロック3層から出土したヘラである。基部に海獣の頭を表現している。首には溝が3本めぐり、柄の部分には2本の切込みが入るが、貫通していない。あるいは未成品かもしれない。第1ブロックからは、刻文系と円形刺突文系の土器が出土している。

第3ブロックHグリッド焼骨遺構からは、海獣

の線刻文土器(65)が多段の貼付文を持つ小型土器と並んで出土した。この遺構が形成されたのは、オホーツク文化貼付文期後半とみられる。65は完形の小型土器であり、上半部に沈線によって動物のモチーフ10頭分が描かれている。海獣や水鳥のように見えるものがあり、さらに想像をたくましくすれば、動物が変身する様子を描いたものとも考えることもできる。

同じ遺構からは、トナカイ角製の指揮棒(66a・b)が出土している。この資料は被熱してバラバラになっており、分岐部と軸部の2点に分けて報告された。山谷(2008)はこの2点が接合関係にあることを示し、動物彫刻の模式図(図26-5)と一覧表を示している。山谷によれば動物は全部で44頭であり、クマ1頭、クジラ37頭、トド1頭、クジラか鰭脚類3頭、ラッコ?1～2頭とされている。トドとされた例は、アシカ類に留めておいた方がいいかもしれない。海獣が圧倒的に多いが、1頭だけのクマが端部に大きく立体的に表されている点は、クマが儀礼的に重要な地位を占めていたことをうかがわせる。この指揮棒の素材について、報告では厚さと表面の状態を根拠にトナカイ角製だと推測していた。山谷によって復元された第一枝と角幹の角度はエゾシカにはみられないものであり、これもトナカイ角だと判断する根拠になるだろう。

宗谷地域 (島嶼部以外)

稚内市 富磯 (図9-67、図25-229)

富磯貝塚は宗谷岬の西側、宗谷湾に流れ込む富磯川の右岸の海岸砂丘に立地する。1961年に北海道学芸大学旭川分校によって発掘調査が行われた。

67は土製のクマ頭部である。拡張区の地表下40cmから出土したという。ただし、この付近は攪乱を受けており、アイヌ文化期とオホーツク文化期の遺物が混在していたらしい。写真左側が破損しているように見えることから頭部破片の可能性もあるが、おそらく頭部像だと思われる。目と鼻は孔で表現さ

れ、口をはっきりと大きく開けている。

229は大場によって「富磯海岸のオホーツク遺跡の近く」から出土したと報告された土製のフクロウ像である(大場1953)。全長8.2cm、重量100g、中空である。刻線による装飾によって羽角をもつフクロウを表しており、シマフクロウの可能性もある。採集品であり、オホーツク文化かアイヌ文化か帰属があいまいだと報告された。アイヌ文化の土製動物像の出土例はないため、オホーツク文化の可能性が高いと判断し、集成に含めておく。

稚内市 オンコロマナイ貝塚(図9-68・69)

オンコロマナイ貝塚は、宗谷岬の先端やや西側に位置する。富磯貝塚からは約4km北にある。宗谷湾にそそぐ小沢であるオンコロマナイ川の川口左岸の海岸砂丘上に位置する。背後の小台地上には堅穴群が残されており、発掘調査によって鈴谷期の集落であることが明らかになっている。貝塚は1959年に東京大学教養学部文化人類学研究室、1966・67年に北海道大学北方文化研究施設によって調査された。動物意匠遺物が出土したのは後者の調査である。

68はネズミザメ吻端骨製のクマ座像である。背面側に欠損がみられるが、クマの頭部や前肢、抱えられた魚などの部分はほぼ完全に残っている。この種の座像としては、簡略化されない写実的な表現である。69は石製の海獣像である。表面に海獣の毛並みを表したかのような細かい擦痕がみられ、前肢の位置に刻線が入る。海獣に似た形をした自然礫にわずかな加工を加えた石製像である。報告にはもう1点が掲載されているが、こちらには人為的な加工がみられないので、集成に含めていない。68はN-22区の第二層(包含層)、69はN-21区の第一層(表土)から出土したが、オホーツク文化の各時期の土器が混在しており、時期の決定は難しい。

稚内市 大岬(図9-70)

松下(1968)が「宗谷村シリウス」出土として報告した資料である。前稿ではこれにしたがってシリウスとしていたが、シリウス(尻臼)は現在の大岬付近を指す旧称であるため、大岬と改める。宗谷岬の東側、現在の宗谷港の付近である。

70はオホーツク文化に特徴的な大形の有孔石錘である。多孔質の石材で作られ、下半部には浅い溝が巡っているようである。体部片面に線刻で魚を2匹表している。魚は幅広の刻線でひし形を基調として記号的に表現されている。左側が上向き、右側が下向きである。

枝幸町 目梨泊(図10-71~80)

道北オホーツク海沿岸は基本的に海と海岸砂丘の単調な地形が続くが、宗谷岬から70kmほど南東に行くと神威岬がオホーツク海に突き出している。目梨泊遺跡は、神威岬の東南側の内湾に面している。目梨泊遺跡では1960~70年代には北海道大学文学部がオホーツク文化の集落の調査を行った。1980~90年代には国道建設に伴う大規模な発掘調査が枝幸町教育委員会によって行われ、1999年以降はオホーツクミュージアムえさしを中心とした学術調査が行われている。これまでに9軒の堅穴住居跡と50基の墓が調査されており、金属製品などの大陸系・本州系の遺物が多く出土している点でも注目を集めている。ただし、大規模な貝塚が確認されていないこともあって骨角器の出土は少なく、見つかった動物意匠遺物も土製品・石製品の例が多い。

71~76は1987年の国道工事で遺構外から出土した土製品である。71・72はクマ頭部を表したものの。71は完形品で長さ4.6cm。72は欠損しているが下面(図右側)が内湾しており、後頭部に斜めの貫通孔をもつ。73・74はネズミザメ吻端骨製クマ座像を模したものの。74は手の指まで表現されているが、73はややデフォルメされている。骨製品にも同様の簡略化された表現のものがある。75はさらに簡略化が進んだものである。76は四本足で立

つ動物像である。頭部を欠くが、クマだとしてもおかしくはない。

77は1990～92年の国道工事で出土した土製品である。耳をもち、口は一本線で表現する。前肢は折れている。クマとして報告されたものだが、プロポーシオンからは海獣に近い印象も受ける。

78～80は、筑波大学と枝幸町教育委員会による学術調査で出土したものである。78は5号住居跡覆土から出土した土製品で、下端部に4本の刻みをいれ、5本の指を表現している。おそらくクマの右前肢を表現したものだろう。報告では四本足のクマ形土製品の破片だとしている。そうした土製品の完形品は知られていないが、妥当な推測だと思われる。

79は包含層出土の鉤状製品。素材は海獣寛骨の坐骨部左側であり、アザラシ類の大型個体の可能性が高いとされている。図の下端には寛骨臼を残し、その先は破損しているが本来はV字形をしていたと考えられる。軸頭部は平坦面になっており、2つの不整な孔を設けている。穴の周辺には紐ずれの痕跡はなかったという。この平坦面に魚の意匠が表現されている。尾部付近は浮彫状となり、頭部から胴部は線刻である。頭部には口やエラ、側縁には短刻線によってヒレが表現されている。福井は、この魚が幅広であることからカレイ類、特にオヒョウを表したものだとして推測している（福井2014）。軸の内側は波状に削られており、それに沿って波状の刻線がある。波の下にいる魚を表現したものだろうか。軸頭部の反対面には、やはり波状の刻線と斜め方向に2本の刻線が施されている。

この資料は器種不明の装飾品として報告されたが、釣針軸の可能性が高いと考えられる。①海獣寛骨を素材とする、②軸頭部を薄く平坦な板状にして糸掛けの孔を設ける、③軸に魚の意匠を施す、④軸に波状の装飾を施す、といった要素はモヨロ貝塚の釣針軸に類例があるためである。一方で軸頭部の孔に紐ずれがみられなかったことは釣針軸と判断する

上では不利な材料であり、モヨロ例も含めて再検討の必要があるかもしれない。

80も包含層出土の釣針軸である。報告ではJ字形の結合釣針軸の完形品として報告されたが、「接合面」に調整痕がみられないことから、U字形の釣針軸の破損品だった可能性もある。軸頭部には糸掛けの溝を巡らせており、その上の端部に掌状の意匠を彫刻している。端部はわずかに内側に曲がっており、短い線刻が3本並んで指が表現されている。破損しているため、全体の本数は不明である。人間とするには指が短すぎることから、クマの左前肢をモチーフとした彫刻だと報告された。

枝幸町 ホロベツ砂丘（図11－81～83）

ホロベツ砂丘遺跡はオホーツク海に注ぐ幌別川の河口部近くの左岸河川敷に位置する。標高1.5m～4.5mの砂丘上にある。1983年に河川改修工事に伴う緊急調査が行われ、オホーツク文化の堅穴2軒とオホーツク文化の各時期の遺物が出土した。

動物意匠遺物は、いずれも遺構外から出土した土製品3点である。81はクマ頭部の土製品である。写実的な作りだが、ややしゃくれ気味な顔つきが特徴である。82はクマが魚をくわえて座しているところを表したもので、サメ吻端骨製のクマ座像を写したものと考えられる。全身にみられる刺突も、骨製の質感を表そうとしたものかもしれない。83は水面に現れた海獣上半身像であろう。首の部分に貫通する小孔がある。この資料も牙製品の写しだった可能性がある。

枝幸町 川尻北チャシ（図25－230）

幌別川右岸の湿地の中にある2つの小島がそれぞれ北チャシ・南チャシと呼ばれている。1971年に枝幸町教育委員会と北海道大学によって測量と発掘調査が行われた。発掘された北チャシの2号堅穴は、オホーツク文化前期の十和田式期の住居であった。

230は遺跡北端の崖部で表面採集された土器片で

ある⁽⁴⁾。沈線文と同心円のスタンプを施し、さらに胴部にクマ足跡の型押文を並べている。この資料はサハリンに分布する南貝塚式の北海道における出土例の一つとされている（氏江 1995）。

枝幸町 枝幸町内（図 11 - 84）

84 は明治年間に坪井正五郎により報告された「北見国枝幸村」出土の土器片である。この資料は枝幸の畠山三次郎が開拓に伴って採集したものを人づてに鑑定を依頼されたものであった。したがって出土地点などの詳細は不明だが、畠山三次郎は明治初期にエサシで漁業を行っていた人物であるので（日塔 1967）、枝幸市街地の海岸部だった可能性が高い。

84 は土器破片の表面に「浮き模様」（粘土貼付）によって四足獣を表現している。坪井は同時に持ち込まれた内耳土器と比較して「貝塚土器」だとしているが、オホーツク土器とみて問題ないだろう。描かれた動物について、坪井はイヌだと考えている。その根拠としては、クマにしては瘦せて足が細いこと、シカやキツネとは尾が異なること、オオカミは害獣なので装飾にしないだろうことを挙げている。しかし、少なくともオオカミを否定した根拠は弱いように思われる。貼付文による動物意匠は水鳥文など定型化されたものが多く、四足獣を表した例は少ない。モヨロ貝塚からの出土例（172）などがあるが、趣は異なっている。

道東部

道東部では 12 遺跡から 144 点が出土している。特に常呂から網走にかけての出土が多い。モヨロ貝塚やトコロチャシ跡遺跡のように比較的多くの資料が出土した遺跡はあるが、道北部における香深井 1 遺跡のように突出して多かったり、特定の器種に偏ったりすることはない。各地域の拠点的な集落から多様な器種が出土しているといえる。網走地域（湧別～網走）、知床地域、根室地域に大別してみたい。

網走地域

湧別川、常呂川、網走川などオホーツク海に注ぐ大河川の河口部付近に形成された集落遺跡から、動物意匠遺物が多く出土している。

湧別町 川西（図 11 - 85～90、図 25 - 91）

湧別川河口部とシブノツナイ湖にはさまれた段丘の縁に位置する。1960 年に米村喜男衛によりオホーツク文化の堅穴 2 軒が調査され、1990 年代には北海道立北方民族博物館による発掘が行われた。

1960 年の調査では 2 号堅穴の南西部の壁際に近い床面からクマと海獣の彫像が出土した。牙製クマ像（85）は 4 本足の姿勢で、ほぼ完成品である。顔つきをリアルに表現しているが、プロポーションはかなり頭でっかちである。首と胴の周りに刻線と列点で帯状の装飾を施している。また、喉の部分には左右を貫く貫通孔をもつ。両脇腹にも孔があるが、貫通はしていない。これらの孔の機能は不明である。牙製海獣上半身像（88）は、アシカ類が海面から上半身を出した様子を表しており、自立する。前肢は浮彫で表現されている。これらの牙製動物像はいずれも丁寧な作られ、滑らかに仕上げられた優品として知られている。色調がやや灰色を帯びているのは、焼けたためかもしれない。

この時の調査では水鳥貼付文をもつ土器が出土した。10 羽分の破片があつていずれも右向きだったと報告されている。このうち 6 点の写真を示した（図 25 - 91）⁽⁵⁾。ゆるい S 字状の両端に円形文をもち、台形状の足を貼付している。水鳥文の直上の貼付文が直線の例と波状の例が含まれており、文様構成については検討を要する。

86・89 は 1960 年の調査以前に清野忠によって発掘されていた牙製品であり、住居内の骨塚から出土したものだといふ。86 はクマ頭部破片で比熱して灰色に変色している。89 は海獣上半身像の小型品であるが、基部は欠損しているといふ。

87・90 は、北方民族博物館による 3 号堅穴の調

査で出土した。87は鹿角製のクマ彫像の頭部破片である。90は鹿角の分岐部に浮彫でアシカ類の後肢のひれを表現したものである。

3号堅穴は貼付文期の堅穴であり、2号堅穴も同時期のものと考えられる。

北見市 栄浦第二（図11-92～図13-103）

栄浦第二遺跡は、サロマ湖東岸から常呂川河口にかけての砂丘上に広がる常呂遺跡群の中核をなす遺跡であり、二千軒以上の堅穴のくぼみが確認されている。地表面の観察によって大型で六角形のオホーツク文化の堅穴47軒が確認されており、さらに発掘調査で見つかったものが6軒ある。道内最大規模のオホーツク文化の集落である。発掘調査としては、1950年代末から60年代にかけて東京大学によって行われた学術調査と、1990年代初めに常呂町教委によって行われた道路工事に伴う緊急調査がある。オホーツク文化期の遺構としては、堅穴13軒、墓11基、動物骨集積2基などが調査されている。時期はオホーツク文化後期（沈線文期・貼付文期）である。

貼付文期前半の4号堅穴床面からは、クマ犬歯製の動物頭部彫刻品が出土した（93）。頭部の形だけが表現されており、目鼻口耳の表現はない。クマとして報告された資料だが、耳をもたないことから海獣と考えた。基部は深い溝を巡らせており、また細く深い盲孔が穿たれている。用途不明である。

貼付文期の7号堅穴の骨塚からは、鹿角製の指揮棒が出土した（92）。焼けて欠損しているが、鹿角の分岐部を逆に利用して、角座側にクマの頭部を彫刻している。94～96も7号堅穴からの出土。94は炭化した木製品の端部に口が刻まれており、海獣の頭部が表現されている。95は海獣の下半身と思われる浮彫をもつ鹿角製品。黒く焼けている。船か橇のようなものに載せられているようにも見えるが、よくわからない。96は鹿角製の棒状製品に、浮彫と刻線・刻点でエイの姿を表現している。また、左

側のU字状のモチーフは釣針軸ではないかともいわれている。刻線・刻点は非常に深く刻まれている。全体の形状は不明だが、下端は丁寧に加工され、先がすぼまる盲孔が設けられている。素材は直線的な軸部であるが直径4.5cmと太く、表面に粒状の組織がみられないことから、トナカイ角の可能性もある。

99・102は11号堅穴表土・埋土から出土した動物意匠の貼付文土器である。99は2羽の水鳥が向かい合って連結したような形である。連結部には円形文を貼付し、貼付文上に刺突を加えている。102はS字状に3つの円形の貼付文を加えている。右上の1つが頭だろうが、下の2つが脚だとすればあるいは水鳥ではないのかもしれない。

97は貼付文期前半の23号堅穴骨塚から出土した角製品である。顔面部分は剥離しているが、右耳が残っており、本来はクマの頭部を作出していたものだろう。鹿角分岐部の角座側にクマ頭部を彫刻したいわゆる指揮棒とみられるが、別の棒状製品と組み合わせる構造になっている点が特異である。98・100も23号骨塚から出土した動物意匠の貼付文をもつ土器である。98はS字状に円形文1つを組み合わせしており、水鳥ではなく「海獣」として報告されたものである。円形文が体の前方についていることから鳥の足ではなく海獣の前肢と考えたものであるが、円形文の位置だけで種を描き分けていたと判断していいのか疑問も残る。100は飛翔する水鳥を正面から描いたとされている。

101・103は包含層から出土したもので、クマ足跡型押文土器である。

北見市 常呂川河口（図14-104～図15-120）

常呂川の河口部右岸、標高1～5m前後の氾濫原に位置する。大きく屈曲する常呂川に三方を囲まれた部分であり、1988～2003年にかけて河川改良に伴う緊急調査が行われた。オホーツク文化の遺構としては、堅穴住居跡5基、墓2基が見つかってい

る。中でも15号竪穴は貼付文期の焼失住居であり、床面から大量の遺物が出土した。動物意匠遺物が見つかったのも、この15号竪穴からである。

104は骨塚上部から出土した指揮棒である。104a・bは同一個体と考えられているが、被熱しており破損が著しい。鹿角の第一枝分岐部を使用し、角座側にクマの全身像を彫刻している(104a)。頭部は立体的な彫刻であるが、胴部は浮彫で表現されている。角幹部は途中で折れているが、彫刻はみられない。第一枝側(104b)には、クジラの浮彫が施されている。残りが悪いが、ヒゲクジラ類を背面から見たものと思われる。この他に、動物意匠をもたないがこの指揮棒の端部だった可能性が指摘されている棒状鹿角製品がある(常呂町教委1996:第70図1・2)。

105～109はクマ頭部の破片であり、やはり骨塚上部の出土である。105は全体を残すが、106は顔の右側、107・108は顔面を欠き、109は顔面部の破片である。110は足部の破片。111は小さな四足獣が手足を広げた様子が表現されており、「小熊が母熊に抱っこしているところかもしくは木登りを想起させる」と報告されたものである。ただし単体ではクマと判断する根拠に乏しいものも含まれている。

112は海獣の頭部を表現したものであると思われる。113は鱧脚類を表現した垂飾である。114は小型の海獣彫刻であり、頭部と尾部が表現されている。115は首の部分に6条の溝がめぐるピン状の製品で、上端に掌状の装飾を施している。クマの手であろうか。素材はクジラ類の歯である。118はヒグマ犬歯製のラッコ彫刻で、手を胸の前に合わせた姿勢、腹の皮のたるみによる皺などがラッコの特徴をよくとらえている。119は端部に海獣頭部を表現したスプーンである。被熱が著しい。113・114・118・119は西側IV域からまとまって出土しており、さらに118は119の上に載って出土したという。

116・117は木製品である。116は棒状製品の端部にフクロウを彫刻したもの。117は上側に5本、基

部側にも1つの突起をもつ。5本の指と手根球だとすれば、クマの右手を彫刻した可能性がある。120は埋土から出土した土器であるが、口径35cm・高さ37cmとサイズの的には骨塚からまとまって出土した「特大型」に属する。口縁部に動物意匠の貼付文を施している。緩いカーブのS字状の右端に刻みを入れて口を表したもので、一般的な水鳥のモチーフとは異なっている。海獣と報告されたが、ヘビのようにも見える。

北見市 トコロチャシ跡(図15-121～図17-143)

常呂川の河口部右岸の段丘上に位置する。縄文時代からアイヌ文化期に至る複合遺跡であるが、北端部にオホーツク文化の竪穴群が位置している。この部分の標高は約15～18mである。東京大学による学術調査および常呂町(北見市)と共同での史跡整備調査が行われている。1960年代に1号・2号竪穴、1990年代から2000年代にかけて7号～10号竪穴が発掘された。

1号竪穴は外側から内側への建て替えがみられ、それぞれ藤本編年のd群とe群の標識資料となった土器群が出土した。貼付文期の前半と後半に位置づけられる。121は1号竪穴の外側骨塚から出土した4本足のクマ彫像である。長さ5.4cmと小型である。被熱して表面が若干ひび割れているが、残りのいい丸彫り像である。素材はトド雄の四肢骨である。132は1号竪穴表層から出土した牙製海獣像の頭部破片。川西遺跡出土例(88)のような上半身像になる可能性が高い。また、この海獣像の首の周りには刻線と列点による装飾がめぐっている。これも川西遺跡出土のクマ像(85)と共通する特徴である。137は1号竪穴の柱穴内から出土した土製品で、土器の把手部分の破片で、海獣の頭部を表現したと考えられる。両側の突起部が目を表しているようにも見えるが、上面に2つ貼付された小円形文を目の表現と見ることも可能である。139は2号竪穴

の覆土から出土した水鳥貼付文を持つ土器片。右向きで、足の部分に小さな円形文を加えている。

125は1990年代のチャシ跡の調査時に遺構外から出土した石製品であり、厳密には時期不明である。丸い目と突出した鼻を表現している。首(?)の周りを細い隆線が一周しており、両側に三角形の表現が見られる。クマとして報告されたものだが、三角形がひれだとすれば海獣にも見えるし、耳だとすればブタにも見える。いずれにせよかなりデフォルメされた表現である。

7号堅穴は貼付文期の古い段階の7a号と貼付文期後半の7b号が重複していた。比較的多くの動物意匠遺物が出土した。まず鹿角製品だが、全て白く焼けている。122は写実的なクマ頭部破片。首の角度から四つん這いのクマ像ではなく、指揮棒端部の可能性もある。126・127はクジラの頭部。126は口と鼻孔2つが見えることから、ヒゲクジラ類である。128はクジラの背面から尾部にかけてを浮彫で表現している。横から見て屈曲しているのは、器体の屈曲部にあたるためだろうか。129はやはり浮彫で魚の姿を現している。131は、海獣像の頭部破片である。口を刻んでいるが、目や耳は表現していない。報告ではラッコの可能性を指摘したが、必ずしもラッコに限定はできない。133はやはり海獣像の頭部破片。目鼻口の表現はみられない。134は海獣像の胴部～後肢の破片で、ひれ状の後肢が見える。135は鰭脚類の後肢を浮彫状に表現したもので、おそらくはアシカ類であろう。

136は土製の海獣像頭部破片。頭部と左前肢を残すが、右前肢は欠損している。鰭脚類の頭部を写実的に表現しており、中空で表面は丁寧にヘラ磨きされている。割れ口を見るとかなり薄く作られており、全身像だったのかどうかはわからない。138・141・143は水鳥貼付文を持つ土器。138は太いクチバシと目、大きな水かきが表現されており、エトピリカを思わせる。141は水上に浮かぶ様子、143は脚で立つ様子を表している。143はほかにも同一

個体の大型破片がある。今回の集成の対象外だが、人の鼻形のモチーフをもつ土器も出土している。出土層位は122、126、127、131、136が埋土、128が7a号床面、133が7号床面、141が7b号床面、143が7a号骨塚である。しかし、埋土出土の資料についても多くは骨塚に伴っていた可能性が高いと考えている。

8号堅穴は貼付文期後半の堅穴である。123・124は8号堅穴の埋土から出土した。いずれも白く焼けた鹿角製品であり、何らかの製品(指揮棒?)の一部だったと考えられる。123は四足獣を浮彫で表現している。頭部には口を刻んでおり、4本の脚も表現している。クマではないかと推測しているが、決め手はない。また、この四足獣の足元にも別の動物の鼻づらの部分(?)が表現されている。クマ(?)よりも大きく見えることから、クジラ類の可能性もある。124は長さ3.3cmと小型のクマ彫像破片である。首の周りと背筋の右側に細い隆起線を浮彫で表現している。これが首輪と引き縄だとすれば飼育された仔グマの姿を現した可能性があり、オホーツク文化のクマ儀礼との関連でも注目される資料である。140は8号堅穴床面から出土した土器片で、貼付文でひれ状のモチーフを表現している。

10号堅穴も3段階にわたる建て替えが認められ、貼付文期後半に位置づけられる。動物意匠遺物は埋土出土の1点のみであった。130は10号堅穴埋土から出土した鹿角製品で、クジラの尾部と波線が浮彫で表現されている。これも指揮棒の破片だと考えられる。

網走市 ニツ岩 (図17 - 144・145)

網走川河口部から北西に3kmほど離れた標高約45mの海岸段丘上に位置する。1970年代に北海道開拓記念館による発掘調査が行われ、3軒の堅穴が調査された。いずれもオホーツク文化貼付文期後半のものである。

144は1号住居跡床面から出土した水鳥貼付文を

もつ小型土器である。逆L字形の貼付文で右向きの水鳥を表したものだと考えられる。145は3号住居跡の焼土から出土したクマ彫像の顔面部破片。鼻と口がはっきりと刻まれている。

網走市 モヨロ貝塚(図17-146~図20-182、図25-231)

網走川の河口左岸の標高5~6mの砂丘上に位置する。竪穴住居跡群、墓域、墓から構成されるオホーツク文化を代表する集落遺跡である。

大正から昭和にかけてモヨロ貝塚の調査と保護に生涯を捧げた米村喜男衛の一連の調査による出土品からみていきたい。主な資料は『モヨロ貝塚資料集』に掲載されている(米村1955)。149は牙製のクマ彫像である。頭部から肩部(?)にかけての破片であり、全体の姿勢は不明である。顔つきは写実的に表現されている。

164~166は海獣骨製の釣針軸に線刻で上向きの魚を描いたもの。165は平行線や鋸歯文による装飾帯の下に魚が描かれる。164は魚の口から波状線が伸びており、釣糸を表しているように見える。166は直線が伸びて横線につながっている様子が両面に描かれている。これも釣糸だとすれば、延縄のようである。171は水鳥貼付文を持つ土器である。簡略化されておらず、はっきり鳥だとわかる表現である。足は一本で横向きのシルケットである。右向きと左向きの鳥を向かい合わせにしたものが5組施文されている。181はカエル貼付文を持つ土器である。上に刻みを加えた粘土紐で四足の動物を描いているが、手足を深く曲げた姿勢からカエルだと考えられている。231は結合式釣針の軸頭部に掌状の彫刻を施したもの。掌は軸に対してやや斜めについている。軸部には横方向の細い隆帯状の装飾が4本めぐっている⁽⁶⁾。

モヨロ貝塚では、北海道内外の多くの研究者による発掘調査も行われた。158は1933年に河野広道による発掘で出土した骨製スプーンで、名取武光に

よって報告された(名取1936)。墓の上部を覆うオホーツク文化期の貝層中から出土したものである。スプーンの匙部分は欠けているが、柄の部分に2頭の海獣が背中合わせに表現されている。

1941年には海軍施設の建設工事に伴う緊急調査が行われた。この時の出土遺物は大場利夫によって報告されたが(大場1955)、動物意匠遺物のような「目立つ」ものについてはほぼ網羅されていると考えていだろう。146はネズミザメ吻端骨製のクマ座像。比較的写実的な表現であり、背中には貫通孔をもつ。魚を抱える様子はない。156は弓弭、162は髪飾り、163は釣針軸である。いずれも端部を少し湾曲させ、口を刻んで海獣頭部を表現したもの。163には貫通孔もみられるが、目を意図したものかもしれない。176~180は水鳥などの動物意匠を貼付文で表現した土器である。L字(176)、緩いS字(177)、円形文の足を付加(178)、棒状の足2本を付加(179)などの例がみられる。176が向い合せである以外は右向きである。180は人のようにも見える形を描いたものだが、小破片であるため、どのようなモチーフになるのかはわからない。

159は大場が北海道大学医学部蔵品として紹介した資料である⁽⁷⁾(大場1962)。器種について大場は垂飾、松下(1968)は異形骨器としているが、骨角製のバックル(帯留)であろう。帯留めの突起部や帯を通す基部の孔も備えている。縁辺に動物のシルエットが4頭分表現されている。端部の2頭は尻尾が短く、側縁部の2頭は尻尾が大きい。松下(1968)はクマとキツネだと考えている。骨角製バックルの表面には優美な装飾が施されることが多いが、縁辺部に動物意匠をもつ例はほかに知られていない。

昭和20年代にはモヨロ貝塚調査団による発掘調査が行われた。この時の出土品の一部は1964年に『オホーツク・知床半島の遺跡』の下巻別篇として報告されている(駒井編1964)。

157は10号竪穴出土として報告されたが、住居西側の貝層から出土したものと思われる。長さ

12.4cmのスプーンで、柄の端部に海獣の頭部を表している。10号堅穴は貼付文期前半のものであるが、西側貝塚は刻文期に形成された。170も10号堅穴出土のクマ足跡型押文をもつ土器片である。

182は、7号堅穴出土と伝えられる石製クマ頭部像である。安山岩製で、長さ59.2cm、幅42.7cm、高さ25.0cmを測る。3D画像からおこした図を掲載しておく⁽⁸⁾ (図27-182a)。モヨロ貝塚8号・9号床面から出土した土製クマ頭部像とよく似た表現であるが、十倍以上の大きさである。この資料については大場(1964)が美幌出土と紹介しており、松下や宇田川の集成もこれに従っている。しかし、現在は網走市モヨロ貝塚館に常設展示されており、網走市立郷土博物館によればモヨロ貝塚出土で間違いないということである。8号・9号出土土製品との類似からも、オホーツク文化の所産である可能性が高い。

147は1948年に名取によって報告されたもので、ネズミザメ吻端骨製のクマ座像である。北大博物館蔵とされるが、いつの出土品かははっきりしない。顔の表現ははっきりしないが、ほぼ全体を残しているようである。

160は幅広の板状製品の上に2頭の四足獣を肉厚の浮彫で表現したものである。尻尾が大きいことからキツネだと考えた。写真の下側は破損しているが、周縁は波状になり、上縁沿いには列点をもつ。また、やや斜めの刻線と刻点・刻みを組み合わせて、縫い目のような表現をしている。出土位置等は不明である。

2000年代には史跡整備のための発掘調査が行われた。8号堅穴と9号堅穴を新たに発掘したほか、墓域や貝塚の調査も行われた。この調査で出土した資料については、遺構ごとに見ていきたい。

9c号堅穴の床面からは、動物型土製品が多く出土している。150は西側の床面から出土したもので、顔面を欠損するが、土製のクマ座像だと考えられる。151は骨塚6東隣の炭化材下から出土したもの

で、頭部を欠損しているが、前後肢の表現がより平板になったクマ座像であろう。報告では「婦人像のスカートのような部分」と推測しているが、足(後肢)をもつ点が説明できない。152は骨塚6の西隣の炭化材下から出土したクマ頭部土製品である。長さ4.9cm、刻みで目・鼻・口を表現している。154は、南西側の炭化材列下から出土したもので、鰭脚類が水中を進む様子を表している。155は骨塚6の西隣の炭化材下から出土したクジラ土製品である。152・155は船形土製品と近接して出土し、クマ・シャチ・船の「3点セット」として注目されたものである。報告時は155をシャチとしていたが、特徴的な背びれを欠いている以上シャチとみなすのは難しいと考え、今回判断を改めた。168は9号堅穴の上層骨集中①から出土した石製品である。前で手を組んでいる点はいわゆるクマ座像と共通するが、基部の幅は狭く自立はしない。

8号堅穴の覆土中には魚骨層が形成されていた。第4段階の魚骨層から、動物意匠の貼付文をもつ半完形土器が出土した(172)。への字形の貼付文に口の刻みを加え、さらに4本の刻みで足を表現している。魚骨層下の床面直上の層であるⅦ層からは、右向きの水鳥貼付文をもつ土器片(169)が出土している。8号堅穴の床面には8ヵ所に骨塚が残されていたが、これらに伴う動物意匠遺物はみられなかった。8c号堅穴の南西部貼床外砂地(床面)からは、クマ頭部の土製品(153)が出土した。長さ5.2cmと9号堅穴出土例(152)より一回り大きく、作りはやや粗いが、表情も含めて共通性が高い。8c号堅穴の時期は貼付文期前半とされているが、魚骨層については時期を絞り込むことは難しい。

7号堅穴は1947年に発掘調査されていたが、148は再調査時に埋め戻し土から見つかったものである。頭部を欠損したネズミザメの吻端骨製のクマ座像である。

10号堅穴西発掘区では、貝塚の調査が行われた。161はVc層から出土した鹿角製の柄であり、端部

に海獣の頭部を作出している。先端は欠損しているため、匙状になるのかナイフ状になるのか不明である。173～175はVc～Vd層から出土したクマ足跡型押文の土器である。173・174は同一個体と推測される。4本指の足跡で、足底球と肉球足根部に擦痕がみられるという。外面に横方向で左右に向きを変えて3列が施され、口縁部内面にも施されている。

知床地域

斜里町 チャシコツ岬下B(図21-183～193)

知床半島の中ほど、ウトロ市街地のすぐ西側で北西に向かって小さく突き出す岬がチャシコツ岬である。チャシコツ岬下B遺跡(旧称ウトロチャシコツ下遺跡)はこの岬の西側付け根の低位海岸段丘上に位置する。

183～187は、1949年に河野広道による発掘調査で1号堅穴から出土したものである。この堅穴では7枚の床面が認められたというが、そのうち第2層住居跡から出土したものである。第2層出土の土器はオホーツク文化後期の貼付文後半期のものである。被熱して割れているが、いずれも鹿角製。クジラ類の頭部を彫刻・浮彫で現したものが4点、尾部と泳跡を浮彫で表したものが1点ある。頭部は顎のラインと噴気孔2つが刻まれており、ヒゲクジラ類を上から見たところであろう。複数の動物が表現された同一個体の指揮棒の破片であった可能性もある。この他に、泳跡のみを現した浮彫の破片が1点あるが、集成には含めなかった。

188・189の2点は、1925年に小林正喜による発掘で堅穴から出土したものである。188はクマの頭部像であり、全体に角ばった作りである。189は鰭脚類が前肢を体側に沿わせ、後肢を後ろに伸ばして泳ぐ姿を現している。背中に長方形の凹みがあり、容器状になっている。オホーツク文化の彫刻は優美な曲面で構成されることが多いが、この2点の資料は、直線的な削りを残している点の特徴である。

190～192は2001年の調査で出土した。190・

191はオホーツク文化貼付文期後半のPIT3(堅穴)床面から出土した垂飾であるが、2点とも被熱が著しい。190は牙製のラッコ像であるが、常呂川河口例(118)に比べると省略された作りである。首の部分には横線でひだが表現されている。前肢は胸の前で畳まれており、尾部端には一孔が設けられているため、垂飾として分類した。191は一端に孔をあけ、縦に多数の刻線を施している。海獣像として報告されたものだが、半分を欠損していることもあり、動物意匠とする根拠は不確実である。192は土器表面に貼付文で四本足の動物を表現したもので、遺構外から出土した。後肢が強く屈曲していることから、カエルを表した可能性が高い。図の左右の斜辺は割れ口ではなく、口縁部突起の破片だと考えられる。

193は2011年報告のPIT4(堅穴)床直出土の土器である。口縁部に水鳥貼付文を施している。2つの円形貼付文を2本の弧状の貼付文でつなぎ、2本の短い足も貼りつけている。細長くてやや上に向く方が頭だとすれば、右向きである。

斜里町 チャシコツ岬上(図21-194)

切り立った海蝕崖に囲まれたチャシコツ岬の上にあるのがチャシコツ岬上遺跡である。オホーツク文化の堅穴は31軒が確認されており、発掘調査の成果から終末期にほぼ限定される。

194は22・23号堅穴の上層廃棄層から出土した小型棒状製品である。両端を欠損しているが、軸部に彫刻が施されている。大きな目や翼の表現があることから、フクロウを表現したものだと考えられる。端部ではなく中間部に彫刻されている点、小型で薄い点などが特徴である。

羅臼町 松法川北岸(図21-195～図22-199)

知床半島の南東側海岸の中央付近、根室海峡に注ぐ小河川である松法川の北岸砂丘上に位置する。1982年、国道の改修工事に伴う緊急調査が実施さ

れ、オホーツク文化の竪穴住居 11 軒が発掘された。時期は刻文期が 6 軒、貼付文期が 5 軒である。遺跡の付近は明治中期から拓けた場所であったが、竪穴は埋め立ててられており、保存状態は良好であった。特に 12 号・13 号住居跡は焼失住居であり、蒸し焼きになった状態で遺存状態の良い木製品が大量に出土した。

195・196 は 13 号住居跡から出土した角製品。195 はクジラ類の尾部と泳跡を浮彫で、196 は鰭脚類の頭部を彫刻で表現している。197・198 は 12 号竪穴から出土した木製品。197 は大型木製容器で、注口部がクマの頭部を模した形になっている。また口縁外側にはシャチの背びれ状の陰刻がみられるが、シャチを表した記号ではないかとも考えられている。なおこの大型木製容器は掲載した実測図では長さ 40.4cm であるが、その後の接合作業により、2021 年現在で長さ 60cm ほどになっている。198 はクマ頭部が鎖状に別の部品と組み合わさっている。全体像は不明だが、精巧な作りである。このほかに、詳細は不明だがラッコの彫像の破片も出土している (199：非掲載)。さらに 11 号竪穴ではイルカ土製品が開口部側に散在した多量のイルカ骨の上に乗るような形で出土したという (232：非掲載)。

以上の 11 号～13 号住居跡はいずれもオホーツク文化貼付文期の竪穴であり、動物意匠遺物の帰属時期も同じであろう。

根室地域

根室市 弁天島 (図 22 - 200 ~ 図 23 - 208)

根室半島の北岸、根室港の北西部に浮かぶ東西 400m、南北 100 m ほどの島が弁天島である。最高地点 10m ほどの平坦な島である。弁天島遺跡は、1878 年にジョン・ミルンによって調査されたのをはじめ、数多くの研究者による調査が行われており、オホーツク文化を代表する遺跡の一つである。発掘された竪穴は 14 軒であり、墓も確認されている。オホーツク文化の各時期の土器が出土している。

204 は北構保男によって戦前に発見された、クジラ猟の様子を描いた針入れである。オホーツク文化を代表する遺物として知られている。205 はやはりクジラか大型魚が中央に描かれた針入れである。204 に比べて線は粗いが、左側にはギザギザの線が描かれ、右側には横の長い刻線とその上に伸びる短刻線が描かれている。中央にクジラ、左奥に山並み、右側に船を配したとも考えられる。

203 は鹿角の分岐部に浮線彫刻によってクジラを描いたものである。クジラから線が伸びており、反対面には船のモチーフもみられることから、これもクジラ猟の様子を描いたものとされる。

202 は 1979 年調査で骨塚から出土した指揮棒である⁹⁾。焼けて状態が良くないのが惜しまれるが、全面に動物意匠と精緻な装飾が施されている。クジラや背びれの立ったシャチ、大きな尻尾のキツネなどが浮彫で表現され、平行する直線・曲線によって飾られている。

200 は国立歴史民俗博物館による調査で 9 号竪穴覆土から出土した、ネズミザメ吻端骨製クマ座像である。頭部を欠損している。覆土からは刻文系と貼付文系の土器が混在して出土した。

207・208 は 14 号竪穴から出土した水鳥貼付文土器である。207 の口縁部と 208 はどちらも細い粘土紐で紡錘状の輪郭を表現する点、頭を円形文で表す点で共通する。207 は円形文で足も表現し、208 は短い 2 本の足を貼付する。207 では、肩部にも S 字状の水鳥文を配している。口縁部と肩部の表現の違いが何を意味するのかわからないが、種の違いを表したものでしょうか。水鳥はいずれも右向きである。

根室市 トーサムポロ (図 23 - 209 ~ 図 23 - 214)

根室半島の先端近くの北岸に入江状に入りこむトーサムポロ湖の湖口北側の台地上に位置する。1930 年代から 40 年にかけて、北構保男氏によって発掘調査が行われた。当時竪穴のくぼみは 6 か所確

認できたというが、発掘の対象は刻文系土器が出土する小貝塚10カ所だった。

210は鳥管骨製の針入れである。図の左側の面は集合沈線と列点で器面を区分し、首と脚の長い鳥のモチーフが刻線で描かれている。大きさと向きの異なる鳥が4羽程度いるようである。反対の面にはクジラないし魚が線刻で描かれている。

1970～80年代にトーサムポロ遺跡 R-1 地点で行われた調査で出土したのが、209～214である。いずれも貼付文期後期後半のものである。

209は、1a号堅穴の土器集中部から出土した指揮棒である。焼けて破片になっているが、リアルなクマ彫像である。本来は屈曲部にクマの全身像が逆V字の軸を抱き抱えるような向きで表現されていたらしい(図26-4)。214は2号堅穴から出土した小型土器で、口縁に動物の頭部を模した把手がつけられている。上面の円形の貼付文2つで目を表し、先端部の小さな刺突によって口を表している。212は2号堅穴の東側遺構外から発見されたクマの頭形の石である。長さ41cmで、人為的な加工の有無は不明。213は6号堅穴床面から出土した水鳥貼付文の土器である。水鳥の頭にあたる部分に刺突を加えている。211は7号堅穴から出土した有孔石錘である。両側縁に浅い抉りが入り、表面に太い凹線でモチーフを描いている。凹線で区切られた範囲に注目すれば上向きの魚、凹線自体に注目すると人間の下半身のようにも見える。類例から判断して、魚としておくのが妥当だろう。

根室市 オンネモト貝塚(図24-215～図24-226)

オンネモト貝塚は根室半島の北岸、トーサムポロ遺跡の2kmほど東に位置する。納沙布岬まで約2kmの地点である。遺跡は入江の西側の標高12～13mの台地上に位置する。1965・66年に東京教育大学によって堅穴2基と貝塚が調査された。いずれもオホーツク文化貼付文期のものである。

215・216はII号堅穴に付属する貝塚から出土した。215は鹿角製で端部に小さくクマの頭部を表現している。反対側はクサビ形に切断されており、別の部品と組み合わせたものかもしれない。216は鱗脚類を丸彫りで表現した骨製垂飾である。後肢部に孔をあけている。217はII号堅穴上層床面から出土したもので、長さ2.4cmと極めて小さな四足獣の丸彫り像である。218は貝塚から出土した板状骨製品で、尾をもつ四足獣のシルエットを表している。217・218はいずれも細長い尾を後ろに突き出し足が短い四足獣である点が共通する。カワウソなどの小型獣の可能性が高いと考えられている。

219～221は釣針軸に動物意匠を施したもので、いずれも貝塚から出土した。219は摩耗が進んでいるが、軸部に線刻で魚類を表したもの。220は軸頂部にフクロウ像を彫刻している。針先部は欠損しているが、U字型になるものだろう。221は外縁にへびを象った細い隆帯を設けた例である。×字状の刻線を連続して施し、頭部も表現されている。

222～226は、土器表面に粘土紐の貼付による動物意匠を施したものである。225は四本の足を広げた様子を上から見たものであり、姿勢はカエル意匠とされるものに近いが、棒状のプロポーションはカエルとは似ていない。その他4点はいずれも水鳥文とされるものである。222はII号堅穴のC区床面溝中、226は貝塚から出土した。224はz字形の左向きになっており、珍しい。

謝辞

以下の諸氏には資料についての情報や図版を提供いただいた。末筆であるが、記して感謝したい。

梅田広大、大塚和義、木山克彦、熊木俊朗、高島孝宗、西本豊弘、藤澤隆史、米田衛(五十音順)

図の出典

図25:表1-(5)に記載

図26-1:加藤・長沼編2017、2:大川1998、3:児玉・大場1952、4:山浦1984、5:山谷2008

図27-6a:筆者撮影、182a:熊本俊朗氏計測

文献

大場利夫 1953「ふくろ像」『貝塚』45:3
 佐藤忠雄・長田良雄・山口巖 1964『稚内・宗谷の遺跡』稚内市教育委員会
 大場利夫 1964「北海道の先史時代の原始工芸」『日本原始美術』2、講談社、pp.160-162（遺物解説p.188、出土遺跡一覧はページ無し）
 大場利夫・新岡武彦・大井晴男・菊池俊彦 1972『枝幸町川尻北チャシ調査概報』、枝幸町教育委員会
 市立函館博物館編 1983『児玉コレクション目録 I 先史・考古資料編』
 網走市立郷土博物館 1990『網走市立郷土博物館考古資料目録』第4集

氏江敏文 1995「南貝塚式土器」に関するメモ」『北海道考古学』31:229-240

野村 崇 1997『日本の古代遺跡 41 北海道Ⅱ』、保育社
 山谷文人 2008「利尻島亦稚内貝塚出土トナカイ角製品の再考」『北方島研究』6:75-84

加藤博文・長沼正樹編 2017『2016年度北海道礼文町浜中2遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター

札幌市「ヒグマ対策 痕跡の見分け方」
<https://www.city.sapporo.jp/kurashi/animal/choju/kuma/konseki/index.html> (2023年2月14日取得)
 北海道教育委員会「北の遺跡案内」
https://www2.wagmap.jp/hokkai_bunka/portal (2023年2月1日取得)

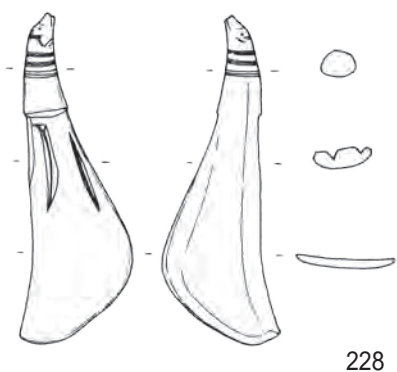
※(1)と共通するものは省略した。

表1-(5) オホーツク文化の動物意匠遺物

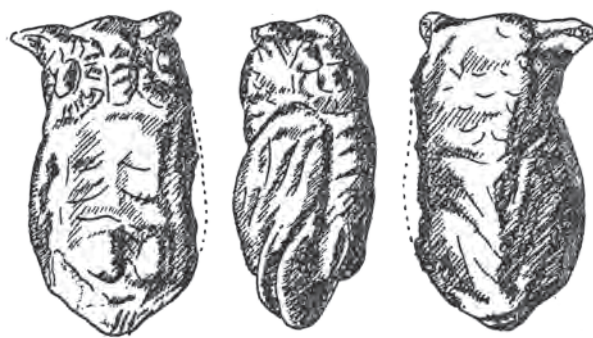
図	番号	自治体	遺跡名	器種	動物	部位	手法	素材	出典	出典図番号	備考
図25	228	利尻町	亦稚貝塚	スプーン	海獣	頭部	立体		岡田他1978	図15-6	
図25	229	稚内市	富磯	動物像	フクロウ	全身	立体	土	大場1953		
図25	230	枝幸町	川尻北チャシ	土器	クマ	足跡	型押	土	木山克彦氏提供(大場他1972)	(Fig.18-3)	
図25	231	網走市	モヨロ貝塚	釣針軸?	クマ	掌部	立体	海獣骨	米村1955	PL.53-12	
図25	91	湧別町	川西	土器	水鳥	全身?	貼付	土	網走市教育委員会1955	図版3、a: 6-59、b: 6-700、c: 6-629、d: 6-82、e: 6-8、f: 6-47	10羽のうち7羽分

(1) この資料については大塚和義先生、西本豊弘先生、藤沢隆史氏にご教示いただいた。掲載写真は、1996年の浜中2遺跡の発掘調査時に筆者が撮影したものである。
 (2) 図のスケールは誤っていたため修正した。
 (3) もっともナナイのトラ彫像は前後肢が短く、一般的にイメージされるトラとはやや異なるプロポーションである。シルエットだけをオホーツク文化の遺物と比べれば、カワウソなどの小型獣とされてきたものに近い。現代人のイメージを当てはめて動物意匠遺物のモデルとなった動物を推測することには当然限界がある。
 (4) 本資料については高嶋孝宗氏にご教示いただいた。拓図は木山克彦氏の提供による。

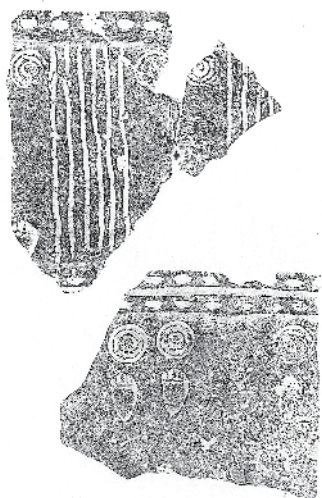
(5) 前稿では米村の報告のみを参照していたが、網走市立郷土博物館の目録に写真が掲載されていた。大きさ等については梅田広大氏にご教示いただいた。
 (6) この資料については、梅田広大氏にご教示いただいた。
 (7) 大場の1955年報告には該当する資料は見当たらないが、市立函館博物館所蔵の児玉コレクションに含まれていることが確認できる(市立函館博物館編1983:図版81)。
 (8) 三次元データは熊本俊朗氏の提供による。計測はScaniverseによるiPhone LiDAR Scanである。資料については網走市立郷土博物館の米村衛氏、梅田広大氏にご教示いただいた。
 (9) 『オホーツク文化—あなたの知らない古代』図録写真82-1を参照されたい。



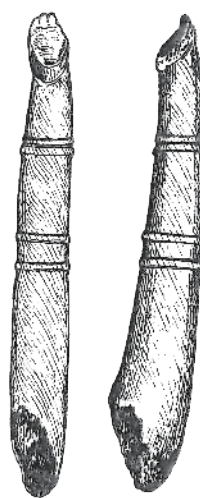
228



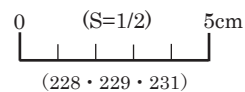
229



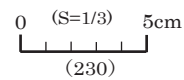
230



231



(228・229・231)



(230)



91

図 25 オホーツク文化の動物意匠遺物：補遺

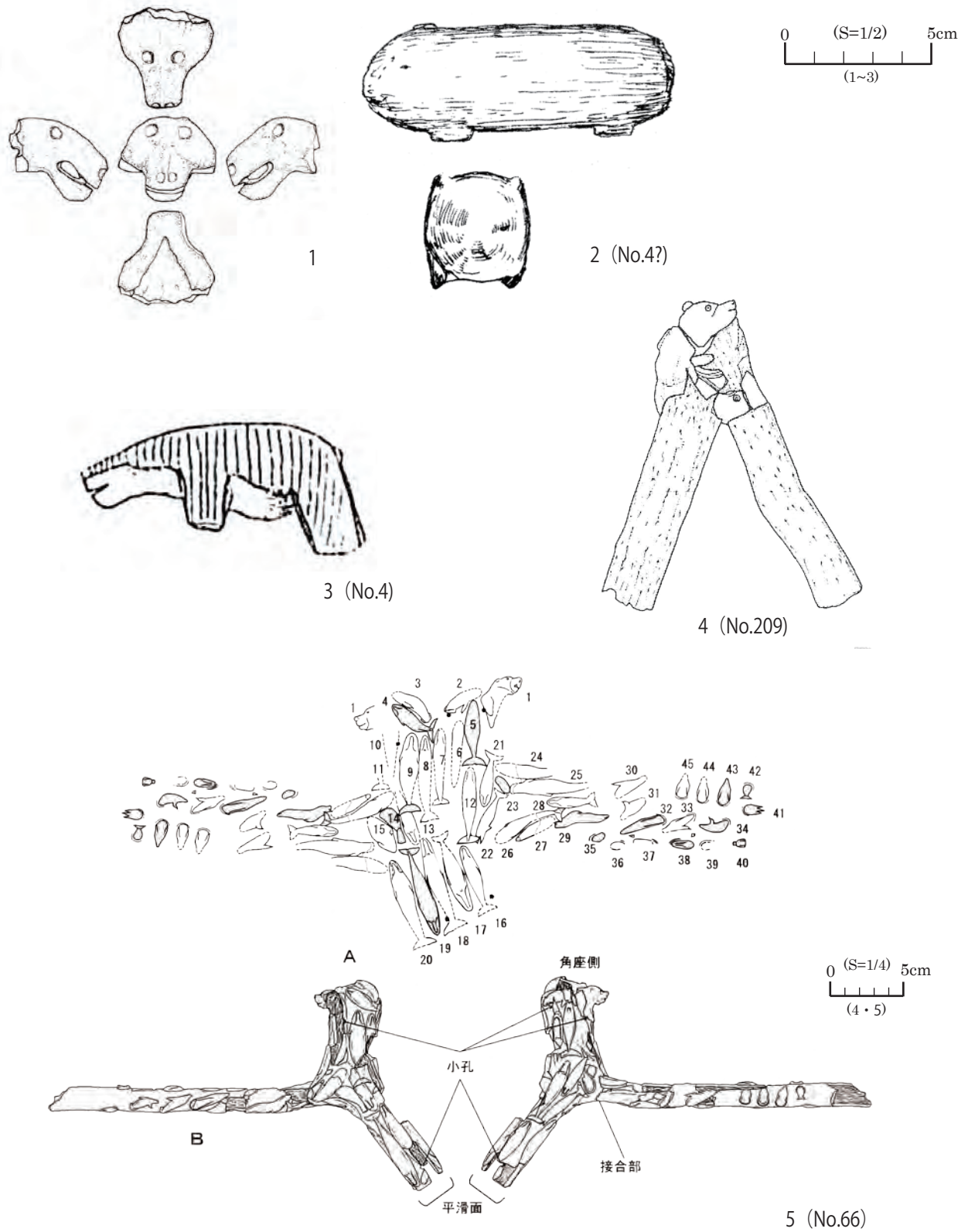
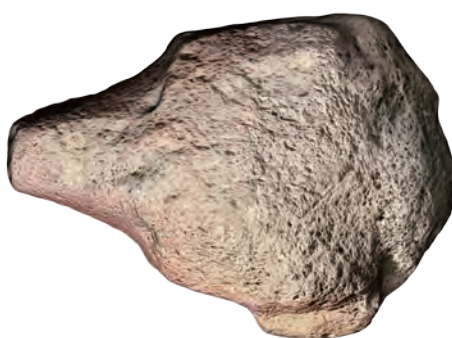


図 26 参考図



6a (縮尺不同)



s-182a

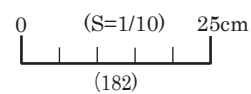


図 27 再掲載資料

横浜ユーラシア文化館紀要 第11号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 11

2023年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館
〒231-0021 横浜市中区日本大通12
Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453
www.eurasia.city.yokohama.jp/

発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
制作 アンクベル・ジャパン株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures
12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan

Published by the Yokohama Historical Foundation
Printed in Japan by ANQBELL JAPAN CO., LTD.

©Yokohama Museum of EurAsian Cultures 2023

ISSN 2758-6332